

平成28年度第5回協働事業評価会

平成28年10月7日(金)午後2時

本庁舎3階 302会議室

出席者：久塚委員、宇都木委員、関口委員、渡邊委員、衣川委員、竹井委員、伊藤委員、
加賀美委員、平井委員

事務局：地域コミュニティ課長、小宮山協働推進主査、勝山主任、松永主事

久塚会長 定足数に達していますのできょうの会議、ヒアリングが中心ですけれども始めたいと思います。

まず、実施方法の説明をお願いします。

事務局 資料1が協働事業評価書で、こちら、きょうのヒアリングの中でご記入いただきまして、来週の金曜日、10月14日までにご提出をお願いします。

資料2は、1年目の評価にあたっての主な着眼点です。

資料3は、協働事業評価スケジュールになります。

資料4は、評価委員の名簿になっております。

このほかに事前配付資料といたしまして9月30日付で団体の協働事業提案書や自己点検シート、相互検証シートなどの資料を郵送させていただきました。ピンク色のファイルなのですけれども、お持ちでない方はいらっしゃいますか。大丈夫ですか。

そうしましたら本日は「地域防災の担い手育成事業」のヒアリングをしていただきます。進め方ですが、最初のところで実施団体が10分程度事業説明をいたします。補足がありましたら事業課のほうから説明します。その後、30分間委員の皆さんから実施団体と事業課に対してのヒアリングという形になります。ヒアリングの後に委員の皆さんと事業課と団体の三者による意見交換の時間を25分ほどとっています。

ヒアリングと意見交換が終了しましたら、委員の皆さんだけで共通認識を持っていただくための話し合いをしていただきます。

以上になります。

久塚会長 今まで経験されている方も多いと思うので流れはわかると思うのですけれど

も、きょう10分間の説明が少し長くかかるかもしれない。事前にちょっと延びるかもしれないということなので、この予定された時刻をずれるかもしれませんが、それは事前に了解ください。

それから、ヒアリングで大体終わりのほうになると、意見交換に近くなってくるような内容に今までなってきました。最初にご質問いただいて、この事業を1年目どうなのかということやさまざま確認ということですが、発言というのは特に割り振っていないわけですから、手を挙げていただいて、こちらのほうで指名させていただきますので、そういう進め方でよろしいですか。

ヒアリングが30分終わったところで、委員と事業課と団体による意見交換という形になる。先ほどヒアリングの最後のほうはもう意見交換のような、何となくそういうふうに沿っているのですが、その後、今度は団体が退席した後ですが、採点するに当たってちょっとわかりにくかったところ、あるいは確認事項があったら別に質問したものの意見交換を、4時までを予定していますけれども最後までよろしく願いいたします。

(一般社団法人ピースボート災害ボランティアセンター・危機管理課職員着席)

事務局 本日はお忙しいところありがとうございます。本日の進め方になりますが、最初の10分ほどで実施団体の方から事業説明をしていただきます。その後、何か補足がありましたら事業課のほうからお願いします。

30分間団体と事業課に対しての質疑になりまして、質疑の後に25分間、委員と団体と事業課の三者による意見交換をしていただきます。

それでは、よろしく申し上げます。

久塚会長 では、ヒアリングを開始したいと思います。お忙しいところどうもありがとうございます。では、10分間ほどということで、ちょっとタイトになりますけれども説明をお願いします。

事業者 今回事業採択いたしました一般社団法人ピースボート災害ボランティアセンター広報担当合田と申します。どうぞよろしく申し上げます。

既に事業採択のところから、それから9月4日にしんじゅく防災フェスタというイベントにも基本的にはお越しいただいたというふうに思いますので、当日のプログラム、そのときにもお配りしましたけれども、皆さんのお手元にもあるものなんかも、振り返りのた

めに少し見ながら聞いていただければと思います。

まず、今回の協働事業ですけれども、二つの具体的なことをやっていくということになっていました。一つはこのしんじゅく防災フェスタという防災のイベント。これは目的としては、新宿区のほうでも首都直下地震がもちろん懸念されるという中で、6年ぐらい前までは総合防災訓練というのを行っていましたが、その防災というものはこういった首都直下が危険視される中、特定のその防災を関係者の方だけのものだけではなくて、防災というのはみんなに関係するのだといったところで1年目、2年目、3年目にそのふだん防災にかかわっていない方にもたくさん意識づけのためのきっかけにしたいというのが防災のイベントということになりました。

それから、実際に災害が起こったときにその対応ができる担い手の方を育成したいということで、このイベントにかかわるボランティアを募集する。そして、そのボランティアを研修していくと、その二つの事業ということで行ってきました。

私のほうからまずそのイベントのほうをご紹介させていただこうと思います。資料の1番というふうにしたものですが、資料の1番、裏面が2番になっているか、別紙になっているか、お配りしていると思います。資料の1番がイベントの概要のご報告ということになります。

しんじゅく防災フェスタ2016ということで、ことし初めての開催になりました。お越しいただいたように戸山公園とスポーツセンターを場所にとということで、特にことしは親子・若者・外国人の参加を促すということで、去年の事業採択の時点では1,000名ぐらいの方に来てもらえればなということで始めましたけれども、準備を進めていく中でいろいろと企画にご協力いただける団体なんかもふえてきたので、4月の契約の時点では1,500から2,000名ぐらいの方に来てほしいというようなどころまで準備は進んでいましたけれども、実際に天候がよくなったというのがもう本当に幸いしたのですが、3,000名近くの方々にご来場いただけたということになります。

特に「イザ！カエルキャラバン！」で子供たちが防災プログラムを楽しんでいたところをごらんいただいていると思いますけれども、あそこに参加した親子を含めてそこだけで約半数、1,500人弱ぐらい来ているので、特にその子供向けといったところが大成成功だったなというふうに思っています。

その他若者に関しては、特にこの後ご紹介するボランティアを通じて参加をしてくれたというようなケースもありますし、外国人向けのプログラムなんかも非常に、十分な活動

ができたかというともう少し次回以降の課題はあると思いますけれども、たくさんやってきてくださったということになります。

それがうまくいろんな企画ができた一つは、危機管理課とピースボート災害ボランティアセンター、当団体だけではなくて、プラスアルファ実行委員会を組んでここにさまざまな団体に入っていた。それから、実行委員会に入らなくともいろんな企画協力をしてくださった団体がいるというので、この2団体だけではなくてたくさんの団体の総力を上げてイベントを実施できたといったところがひとつよかったのかなということに思っています。

最後にメディア掲載ということで少し書いていますけれども、NHKでの放送があったりですとか、地域のケーブルテレビ的な放送があったり、それから教育番組、これは今製作しているというような何かがあるので、今後今年度じゅうにもう2本、3本ぐらい番組がつくられるということになると思います。

イベントの補足資料としまして、資料3というA3になったもの、これが当日戸山公園、それからスポーツセンターでプログラムをやりましたけれども、カウントできるところに各プログラムの参加者数ということで入れています。ブースのコーナーなんかはもう流動的に人が動くので総体はわからないのですけれども、各プログラム参加してくれた方の数というのもそこに入れていますというものです。

それから、あと資料の4ですけれども、私たちもこの特に1年目の協働事業、それから協働事業ということ自体の仕組みも新しくチャレンジするというような形だったので、危機管理課と当団体の役割分担もそうですし、そこにまた実行委員会がプラスするというところで、そのだれが何をどの時期にやっていくのだというようなことの実行委員会のミーティングというのを毎月持っていきまして、それにどの時期にどういったことをだれがやっていかなければいけないのかというようなこういった一覧表で確認をしながら役割分担を進めてこれたのかなといったところを思っているということになります。

いろいろと細かい改善点はたくさん来年に向けてはあるのですけれども、まず来場者、それからターゲットにしていた親子を中心にたくさん来てくれたというのは本当によかったなというふうに思っているのがまず前提です。

もう一つの事業の柱であった担い手育成ということで、このイベントに関するボランティアのところを資料2で笹田から報告させていただきます。

事業者 ピースボート災害ボランティアセンター、スタッフをしております笹田と申し

ます。本日はよろしくお願いたします。

私は主にイベントに関してはボランティアに関することを担当しておりました。資料2、地域防災・減災の担い手育成実績（9月時点）というのをごらんください。

まず、目的なのですけれども、このイベントの準備、あとは当日のボランティア活動を通じてその災害時に動ける人材の育成を行うということがまず目的で行いました。募集は2番にあるとおり4月から行っておりました。ボランティアの種類なのですが、3番にあるとおり4種類ございます。Aのフェスタ運営ボランティア、こちらが準備です。イベントよりも前の段階に募集を始めて事前に研修にも参加していただいた方々です。BからD、語学、当日、ブースボランティアに関しては当日のみの活動をしていただいたボランティアさんになります。

募集条件、4番はこちらにあるとおりです。

5番、募集方法なのですけれども、基本的にはしんじゅく防災フェスタの公式ホームページやフェイスブック、あるいは実行委員会の団体の関係者からの紹介だとか、あとは大学生のサークルに直接声をかけたりだとか、そういった方法で募集を行いました。結果としては主に当日ボランティアは大学生の方がたくさん来てくださいます、ボランティア全体の7割以上の方、71.3%の方が10～20代という若い方にご参加いただけました。

6番の研修内容なのですけれども、こちらは主に運営ボランティアの方々が事前にどういった防災に関する研修をしていたかという一覧になります。テーマはさまざま、自分の家の災害対策を考えたりだとか、あとは避難所、地域について考えたりだとか、そういったふうにテーマをいろいろ定めて研修を行ってきました。

研修に関しましては、今皆さんにごらんいただきましたA3の資料4の下のほうにボランティア、担い手育成のスケジュールが別々書いてありますので、こちらもご参照いただけたらと思います。

また資料2のほうに戻るのですけれども、最終的には一番下にあるとおりボランティアの参加人数は合計219名となりました。内訳は以下に書いてあるとおりです。

私からは簡単ですが以上になります。

事業者 二つの事業をもうザックリですけれどもご報告させていただきました。基本的には1年間の年度の事業ではありますが、このしんじゅく防災フェスタというイベントに向けて動いていくというものは、準備段階はもう4月よりももうもっと早目から動いてき

ましたというところと、今年度に関しては実際に使った経費なんかも含めて、それから事業の実施に含めてもう9割方終了して、その振り返りとともに次年度に向けてもう動き出したいという段階まで来ているということになると思います。

ここまである程度9割方終わったといったところで振り返った雑感で言うと一つは、1年目だったのでいろいろ手探りは正直ありました。本当に初めてチャレンジするような、私たちの団体はいろいろやってきましたけれども、初めてのチャレンジもたくさんあったのでうまくいかないところも、それから新しく身についたこともたくさんあったなと思います。

それから、二つ目は人事が正直結構大変で、私たちの団体ももともと想定した人間が退職するというようなことも実はあったりとか、それから熊本地震で予定していた人間を現地の支援活動に異動させるというようなこともあったので、私たちの団体もそうですし、それから危機管理課のほうも人事がありましたし、実行委員会のそれぞれ協力団体にもいろいろとやっぱり4月で変わったというのがあったので、そのあたりでちょっと大変な部分は正直一つはありました。

あとはこの後ご報告しなければいけないのですが、予算面といったところが、去年の採択時点では1年目470万ぐらいといったところでやっていたけれども、いろいろと企画を盛りだくさんにやっていた中で、4月時点で580万円ぐらいまで、約100万円ぐらいのプラスの事業にしたいということで補正をさせていただいて、最終的には550万ぐらいの今年度の事業の経費になったかなといったところになると思います。

こういったところを踏まえて資料の5をごらんいただきたいのですが、こちらは危機管理課のほうで作成していただいたのですが、こういったことを出して実施していくのかというのを、計画を1枚にまとめていただいたものです。右下のあたりに今後の展開といったところで、ちょっと字が小さいのですが、3年間かけてやっていく協働事業だということで、ことしは特に親子・若者・外国人の人たちにも参加できるような仕組みをつくりたいといったことをチャレンジしてきましたけれども、それだけでみんなが参加できているというふうには思わないので、少しまた層を広げていくというチャレンジを来年度以降もしていきたいなというふうに思っています。

これも最終的には実行委員会が決議の場所というふうにはしているので、テーマ設定も実行委員会で改めてやりたいとは思っていますけれども、できれば障害者の方ですとか、そういった要援護者の方々に関するプログラムといったところは、次年度はもう一つ取り入

れていければなというのが現段階で考えているものになります。

それもやりながら、またもう1年先には各町会ですとか、またこれまでと違った層がここにかかわってこれるといったことを少しずつステップアップさせていっていければなというふうに思っているところです。

資料6は、先ほどザックリ口頭だけでご説明しましたけれども、4月の時点で580万ということで補正にさせていただいていた収支の予算書というものを添付させていただいています。このうち特に100万円ぐらい予算が上がったというのは、プログラムが増えたというのもそうなのですけれども、助成金でUMCORという団体とCWSという団体からそれぞれ100万円、60万円ぐらいの助成金をいただいてこのプログラムを実施できるというふうなお声をいただいたこともあってプログラムの量、予算も上げるということにしたということになっています。

最終的な決算に関しては、まだ総括が済んでいないものももちろんありますので、全体の事業の報告に合わせてこれは提出させていただきたいと思っています。

当団体からの説明は以上です。ありがとうございました。

久塚会長 どうもありがとうございました。短い時間なので二つの育成のほうとイベントのほうと一つずつ、危機管理課のほうから補足の説明はございませんか。

事業課 では、少しだけ。危機管理担当部危機管理課地域防災担当副参事の安藤と申します。

9月4日当日は会場においでいただきましてありがとうございました。

では、今、ピースポートの合田さんのほうから資料1から6に基づいての説明がございましたので、私のほうは資料5という、今、A4版横のカラー刷りのこの資料で目的、事業内容というところは合田さんのほうからお話がありました。大きな目的としてはやはり区内50カ所の学校避難所において防災訓練、啓発も含めたところを実施しているところではございますけれども、大体50カ所で延べ6,500から7,000人ぐらいが毎年参加する。これは区全体からの人口からとらえるとほんの一部の方々。特にその中で参加されている方というのがいつも同じ方、ただご高齢の方というのが現状でございます。そこを何とか改善、解決していきたいと。もっと地域防災力を高めていきたいということで、今回9月4日初めてピースポートさんと協働でイベントを行ったところなのですけれども、私の経験からはあれだけ親子連れ、若いお父さん、お母さんの姿を見たのは初めてでございます。大変満足しているところでございます。

また、その担い手育成というところでさまざまワークショップ、研修等もやらせていただきました。トータルで200人を超えるボランティアの方が参加されていますけれども、今後このボランティアに参加された方をどのように地域の防災の担い手、力としてつなげていくかといったところが大きな課題であると認識しているところでございます。そういうところを今後また反省会、また来年度、再来年度の事業の中でしっかり高めていきまして、地域防災力と、自助・共助の部分になりますが、首都直下地震の発生の逼迫性が指摘されていますので大切な命を守ると、そのような事業にしていきたいというふうに考えています。

以上でございます。

久塚会長 全体的に非常にいい関係ができて前向きで、初年度ですけれども、先の課題もキッチリ見えたという印象なのですが、これは会長の印象で、ほかの方たちはちょっとわからないのでいろいろご質問させてください。

では、委員さん、順番は構いませんので積極的に質問してくれるようにして、伊藤さん。

伊藤委員 伊藤ですけれども、今回のイベントを見ると、人も集まってかなりののにぎわいといえますか、成功だったということでは正解だったと。一つこの提案書の中とリンクしてくるのかわかりませんが、ボランティアさんがかなり集まっているのですが、この提案書で言うコアボランティアというのは、そのボランティアが集まった中のどこに含まれるのか、まず。

事業者 コアボランティアという名称だったのですけれども、資料2を見ていただくとAからD、3番募集種類のところにAからDがあると思うのですが、この運営ボランティア、Aのフェスタ運営ボランティアというのがそのコアボランティアに当たり、人数は21名になります。

伊藤委員 20名の予定のところは21名で合計で言うと。

事業者 そうです、はい。

伊藤委員 それともう一つですが、ちょっと大きな話になりますが、災害時は東京都の連絡も絡んでくると思うのです。多分東京都が新宿区のどこかに本部、地区のまとめるような本部ができると思うのですけれども、そういうところとの絡み、連絡ということは考えておられますか。それとも、新宿区のほうでもそこは多分。

平井委員 東京都については、都庁のほうに東京都の災害本部ができます。新宿区についてはここに新宿区の災害本部ができて、ちょうど無線だとかデータでやりとりをすると

いうふうな形、システムでやりとりするというような形になります。

それとは、そのほかには警察だとか消防などの関係機関とやりとりしながらやると。

事業課 東京都は広域的な立場で全部の市区町村を見るということで、部長が申し上げたとおり災害情報システム、DISシステムとか入ってしまっていて、そこで全部情報はどんどん共有していくというふうな形になるということで。あくまでも市区町村のほうで災害本部は設置して応急活動は実施してまいります。

補足で言うと、災害時のボランティア活動というのもまたその行政の仕組みとは別でできていて、主には社会福祉協議会なんかは災害ボランティアセンターを立ち上げると。新宿区の場合は区と社協さんで合同でというふうな形になっていますけれども、それは私たち例えば熊本地震のときなんかはそういった災害ボランティアのセンターだとか、集まってくるNPOとの協働連携、それからもちろん行政との協働連携といったところ、被災地の支援活動で実施していますし、首都直下が起こったときはその新宿での動きというのは一方社協さん、それから区の方々に意見交換なんかをずっと進めているところですし、東京都の都域の災害ボランティアの仕組みというのも動き始めているので、そういったところの訓練に参加したりミーティングに参加したり、直接この事業と今接点があるわけではないのですけれども、別の動きとしてはそこは担ってやっているところです。

伊藤委員 平常のいろいろ連絡会の中で都の連絡と、ないしはそこへの人員の張りつけというものもおおいおいできていくと。

事業者 話にはなっています。まだそういう仕組み自体が固まっていない、ボランティア側のものもあったりするので。

平井委員 区のほうでやるのは社会福祉協議会が、例えばスポーツセンターにボランティアセンターを設けて、そこで集約をして、それぞれ必要なところに配置していくというような仕組みはできています。

事業者 実は今回実施場所を戸山公園とスポーツセンターを選んだのは、私たちのほうでは実はそこを一つあって、災害ボランティアセンターというのはスポーツセンターを使うことになっているので、使い勝手だとか人が集まったときにどういう動線とか、何かそういったところも少し訓練のかわりになるかなというふうなことも実は頭の片隅にあって会場を選ばせていただいたというところです。

伊藤委員 ありがとうございます。

久塚会長 はい、渡邊さん。

渡邊委員 はい。予算が100万円近くくださるということで、それでお伺いしたいところがその担い手としてのボランティアの方々がすごくたくさんふえてかかわってくださるのはありがたいのですけれども、同時にコストもそれだけかかっているのではないかなという懸念材料があって、その資料6の中で示されている数字の中では、その当日を含めてボランティアの方々にかかったコストというのはどこに描かれているのかということと、あと来年以降もその担い手としてボランティアの方々を募った場合に、ことし程度に予算が膨らんだとして、それをどのように賄っていかれるのか、その点についてお伺いしたいのですが。

事業者 まず予算で少し当初予定より膨らんだといったところからちょっと順を追ってお伝えしたほうがいいのかと思うのですけれども、一つはまず事業採択の時点では当日やるプログラムをどれにしようとか細かいところまでまだ固めていなくて、こういうことをやりたいなというところでしたが、見積りもまだあまりとっていなかったというような段階です。

特に子供たち向けのカエルキャラバン！というのをやりたいとなったときに、これはプラス・アーツさんというほかのNPOさんが持っていらっしゃるプログラムのパッケージで、それは事前の育てるところから含まれているのですけれども、搬入費なんかも入れて全部で80万ぐらいかかるというふうなものだったのです。それはもろもろこちらでできるものはやるし、不要なものはちょっと今回はというようなことで30万ぐらい下げたというようなことでやったりですけれども、それでもボンと50万円のプログラムパッケージがのっかってきたというようなところはあります。

それから、あと公園の使用料が実はかかると思っていなかったというのがあって、20万円のところが11万ぐらいに何とかやったのですけれども、この戸山公園であまりイベントで使っていない会場なので、ふれあいフェスタといった大きなものがあるのですが、ふれあいフェスタは実は減免が全部効いているというふうに聞いていて、それで使えるのだからというふうに確認せずにやっていたのですが、実はやっぱり使用料が要るということで、11万ぐらい最終的にかかりました。

これとかは採択の時点では全く考えず、すみません、考えていなかったものです。あと雨天時の対応が結構実はつらくて、当日晴れたのでそのほうがよかったのですけれども、むだになったのでよかったのですが、雨が降って外でちょっとやるのはねとなった場合は、スポーツセンター内の体育館を別途抑えていて、スポーツセンターは区の施設なので利用

料自体は要らないのですけれども、そこに汚れないように養生のブルーシートみたいなのを全部張って、それから持ち込みの物等が変わってくるので、予備で入れていただけて実は雨用に30万ぐらいかかっているのです。これはちょっと雨のときを、大雨も実施を中止にして、基本的にはもう外で頑張るといようなプログラムに内容にするとか、そこはちょっと実は要検討だなと思っています。

ことはちょっと特に1年目で、体育館でやるとすごい悪条件がもろもろあるのですけれども、ただ実施したということをとにかく1年目には成果を上げたいというところがあったので、30万むだになるかもしれないけれども積んだというところは正直あります。

ご質問のボランティアの人がふえたのでといったところはお弁当が例えばふえたのを、スタッフ・ボランティアお弁当とかというのが7万円というのが実になっているのですけれども、これとあとTシャツを、オレンジのTシャツを着てボランティアの人たちは活動してくれていましたけれども、あのTシャツ代とかというのも実はかかっています。

580万ぐらいかかるかなというのを少し550万ぐらいに下げられたのは、Tシャツを見積もり時で1,200円ぐらい1枚かかるところを何とか700円ぐらいで見つてきたとか、そういう細かい1個1個の節約によって最後何とかギュッと下げたというような、そういう状況になっています。

来年に関しては、ことし助成金をいただいたUMCORさん、CWSさんといったところは、もう一度お話しするのですけれども多分難しい、もしくはCWSさんのほうは60万ではなくて半分ぐらいとかというようなところならいけるかもというところなので、130万ぐらいは減るかもしれないというところなので、一つは民間の助成金みたいなものとかをもう1回考えなければいけないのと、それから企業の協賛、今回は物品提供という形でいただいているものが多くて、例えば当日スタッフが使っていた無線とかは、これは普通に借りると多分5万円ぐらいかかったものなので、無料でいいですよというふうにいただいたとか、それから伊藤園さんからお茶をいただいた。これもスタッフの弁当代にお茶がついていますけれども、それが要らなかった。何かそういったところをやっていたけれども、実際に現金での寄附というものも少しいただけるように幾つかの企業をもうちょっと回りたいなといったところはあるというところではあります。

その当てが今年度じゅうぐらいに少し動き始めて、危機管理課ともご相談しながらここに当たれますかねといったところを考えているのですけれども、当てがなければちょっと予算を下げて、要らないかもしれない企画とかというのはちょっと切っていくというこ

とは正直考えなければいけないかもしれないです。私たちの団体もそんなにお金がある団体ではないので、あまり持ち出しをできる余裕はないので、基本的には確保できる予算内の事業にしていくという姿勢はもっともっと盛り上げたいという気持ちがある一方、予算のことは同時に考えていかなければいけないのだと思います。

逆に何かこういう予算と抱き合わせてやったらいいみたいなことで皆さんのほうにあるのだったら、そのねたが十分私たちもないので教えていただけるとすごくうれしいという。

渡邊委員 少なくともボランティアの方々がふえたことが、費用的には圧迫になっているのではないかと。

事業者 多少はしました。多少はしましたけれども、そんなに何十万もということではないです。

渡邊委員 不測の事態へのほうの備えのほうが大きくのしかかった。

事業者 そうです。

事業者 はい。

渡邊委員 わかりました、ありがとうございました。

久塚会長 竹井さん、どうぞ。

竹井委員 今回いろいろやっていただいた中で最終的にこれの効果です。効果をはかるために何かアンケートみたいなのをとって、皆さんからどういう効果があったかというのをいろいろ調べていきますとあったと思います。今年度とって、また3年間たっているという話だったのですけれども、そこでの内容というのは何か集計されたのだったらどういう内容だったかというのをちょっと教えていただきたいなと思っております。

また、その中で当初多分これぐらいの予測をしていたのだけれども、実際に終わった段階でこれぐらいふえたというものも、予測と結果がもしあればそういうものも例えば避難場所というのは大体これぐらいみんなわからないのではないかという想定の中から今回それをプログラムに向けてこれぐらいだったとか、そういうものというものを予測とかもあればそれも合わせて教えていただければと思いますけれども。

事業者 まず、アンケートは来場者のアンケートと、それからボランティアにかかわった人のアンケートというのを基本的には2種類といった形でとりましたけれども、実際ちょっととり切れなかった、数としてはとり切れなかったというのが正直なところあります。特に子供たちへのアンケートができなかったのです。それは内容も含めてですし、あのぐしゃぐしゃの中でやっていくのがイベントを妨げるような形にもなりそうというので、プ

プログラム自体実行委員会の中のYMCAさんの団体職員とボランティアさんがある程度担っていただいたのですけれども、あそこで1,200から1,500ぐらい来ているので、そこにアンケートをしなかった、できなかったというので、ちょっと数自体は少ないのですが、来られた百数十名ぐらいのアンケートからは、まず来場者の年代で多いのは30代が一番多い。30代、40代、20代というようなそういった順番で来ていて、そこで半数強ぐらいです。

なので、防災の訓練とかイベントになると高齢者の方が中心になるといったところと言うとそれ以外の層をある程度まずは来た。見た目からもそうだったと思いますけれども、そういったところだと思います。

楽しみながら防災の取り組みを知ってほしいというのがイベントの趣旨なので、そこに関しては86.4%の方が防災の取り組みについて楽しみながら知ることができたというチェックをつけていただいているということになります。

そのほかアンケートをとったのは、どのプログラムに参加しましたかというようなことですとか、その中で特におもしろかったことはといったところで、一番役に立った、楽しかったプログラムは防災訓練・体験コーナーといったところで、危機管理課のほうで中心にまとめていただいた、いろんな関係機関の団体のところですか。消防のところを含めてといったところが一番多くて、その次に「イザ！カエルキャラバン！」と、イベント等になります。

意識の変化のところと言うと、「本日の防災イベントに参加して各家庭、または自分ご自身で防災対策をしようと思いませんか」という質問もしました。それは74.5%の方がしようと思うと。既にやっていますよと言う方もそこに11.8%いらっしゃるんで、86%ぐらいはもう既にしている、もしくはこれをきっかけにちょっと頑張ろうと思いましたという状況になっているというところですか。

何をしようと思いませんかといった中で言うと家の家具の転倒防止ですとか、それから備蓄品の見直しだとかそういったところ、あと家族と話し合うとか自分の身の回りでできることというのをまずやってみようと思うような回答が一番多かったのかなというふうに思います。こちらが来場者のほうです。

ボランティアに関してはちょっと4種類のボランティアを集めたというふうに言いましたけれども、ブースでお手伝いいただいたボランティアにはアンケートをしていません。運営のボランティア、語学のボランティア、当日のボランティアという3種類でやりまし

て、ここで108名のアンケートをいただいています。

年代等々は先ほど笹田から言ったとおりということになります。高校生、大学生なんかを中心に一番多かったというところですね。このボランティアの方々、ちょっと運営ボランティア、コアボランティアの人たちというのは事前研修も受けたし、当日のボランティアは研修の場所というのは午前・午後でボランティアのシフトを分けたので、午前シフトに入った人は午後のほうで勉強してねと。午後のシフトの人は午前中のプログラムに参加して勉強してねというつくりにしていましたので、ちょっとどのぐらい研修を受けたかというのは大分ばらつきがあるので同じアンケートになってしまっているのですが、その中でも今後どのような防災・減災にかかわる活動をしたいと思いますかといったところには、まず家のところの防災・減災対策の見直し、ここは複数回答可ですが68%。それから、避難所の場所や避難所の位置確認とか道のりを確認したいというのが48%。そういった訓練に参加してみたいというような人たちが36%、それから募金とか災害ボランティアで被災地支援の協力をしたいというような方々も37人なので、やっぱりボランティアという一つのツールを使って入ってくださった方というのは、もう各家庭はもろんなのですが、それプラスアルファ外への防災の何か応援ができることがあればと、それからふだんからできることが、もっと地域にとってできることがあればという、もう少し広がっている層なのかなというふうに思っています。

竹井委員 ありがとうございます。

加賀美委員 ちょっと評価するのにお聞きしたいのですが、自己採点シートの話なのですが、今回それぞれ評価等、ピースボートさんが評価をされて結構全体的に見るとピースボートさんはよかった、よかったと言っているのですが、区のほうはちょっと課題があるかなと考えている面があって、特に差が大きいのがIの協働事業の計画づくりの①番、計画づくりのプロセスで双方がどのように協力して取り組みましたかという質問1、率直な意見交換のもとに、対等な立場で計画づくりを進めましたか、対等というのがピースボートさんは5番なのですが、区はちょっと課題があるけれどもということ、おおむね達成されたけれども課題がありますよと答えになっているのと、もう一つ②の協働事業の質・効果の向上に向けて、どのように計画を検討しましたかの質問7です。協働を行う意義や必要性を相互で検討・確認した計画になりましたかというところなわけですが、区のほうは3、ほぼおおむね達成されたのだけれども課題があるとお答えになっているのですが、ちょっとここら辺が大きな開きがあるのですが、そ

れぞれそれに対する認識を区のほうも含めて聞かせていただけますか。

事業課 では、私のほうから区のほうの立場でご回答いたします。冒頭に合田さんのほうからこの協働事業というのがお互い初めて実施した。イベントだけのにぎわいを見ていたらうまくいったねというところもあるかとは思いますが、私ども危機管理課の立場として初めてというところもあったのですが、役割分担というところでフィフティ・フィフティではなくて、これはちょっと感覚的なところがあるのですが、すごくこのピースボートさんがアイデア、経験豊富、そういうものに基づいて7対3ぐらいでどんどん企画等も出していただき準備もやられたなど、これはちょっと甘かったのかもしれませんが。そういうものではない、なかったかもしれない、協働事業は。

正直そんなところもありまして、お互いの強みを生かしたところの準備、その協働、役割分担というところで認識が若干違っていたというのと、そこらでこちらも少し戸惑いながら動いていた。それでこの①のQ1の対等というところで、もう少し私たちもやれるところがあったのではないかと。ピースボートさんももう少し頑張ってもらえるところがあったのではないかと。私たちの評価は課題があるもののおおむね達成ができたというものになっています。

②番のことは、ここも今ご回答させていただいたところに付随するのですが、実行委員会形式ではやってきましたが、協力団体とか実行委員会に加入されている団体の数が多くて月に1回、大体月に1回ぐらい会議を行っていました。そこが十分だったのかどうかというところもあります。そういうところで協働で行う意義や必要性を相互に検討・確認した計画となったのかと、そういうふうにより問われると、もう少しその辺を時間をかけて準備段階からしっかりやっていたら、今回ほぼ120%の結果は出たと思うのですが、もう少し違う形でも実施できたのではないかと。そういう評価のもとに3というふうにつけさせていただきました。

以上でございます。

事業者 まず、この会の前にお互いで自己点検シートを持ち寄って見せ合いっこというようなやつをやったのですが、雑感で言うとまずは1年目に達成したかったことというのでも達成したらきちんと評価をしたいというような。改善点は幾らでもあるのですが、1年目と言ったところでまず達成するというのが、合格なら合格の点数をきちんとつけようとしたのは多分私なのだと思うので、そこで全部1点ずつぐらい多分私たちの団体のほうは上のものが多いというようなのが大分あると思います。

二つ開きのところで言うと今安藤さんがおっしゃっていただいたようなところはもちろんあると思うのですが、例えば今回一番成功したなと思っているのは子供向けのプログラムの「イザ！カエルキャラバン！」というものだと思っておりますが、あそこに関しては私たちのアイデアではなくて、実は去年の段階で危機管理課のほうから出していたアイデアで、説明会を一緒に聞きに行きませんかというのを、これは4月からというふうにとらえたか、去年もう始まったときからという計画でとらえたかが、実はちょっとそこがずれていて、私はもう去年の始まった段階からという計画にしていたので、そうすると「カエルキャラバン！」を提案していただいたのがまずは大成功なのだと思います、それは私たちのアイデアではないので、そういった意味ではそういった企画のアイデアも含めて危機管理課からも十分出していただいたと。

それから、いろんなもちろん新宿消防の方にこれだけ全面的にご協力いただいた。それから、関係機関の方々に最終的にはたくさん出ていただきましたけれども、ここのお声がけだとかアイデアだとかというのも私たちには非常になかったもので、そういった意味では危機管理課から広げていただいたものというのはすごくたくさんあるというふうに思っています。もっと早目から頼ればよかったと言えば、もっとそういったところはできたのかもしれないのですが、そこがやっぱり1年目でどこまで、しかも協働事業といったところの言葉の定義だとか委託と協働みたいなものとかというのはやりながらこんなのかなというのを手探りしていったところなのかなと思います、その手探りをしていくというプロセスが大事なのだらうと思って、私的には手探りをしたつもりはあるので5というようなそういった評価といったところなんです。苦労したほうが5になるのだらうと思って点をつけたという感じかもしれないです。

久塚会長 ある程度時間が来たので委員のほうからヒアリング、プラス意見交換みたいな形があるかもしれませんが、ちょっと形が変わるかもしれません。

宇都木さん、どうですか。

宇都木委員 幾つか教えてください。この参加人数のカウントの仕方はどうやってカウントをしたのですか。わかるのは、例えばはしご車なんていうのは整理券を配っていましたからわかるのですが、そのほかのところ、例えば防災訓練、1、980人なんてなっていますが、これはどうやってカウントしたのかということをごちょっと教えてくださいませんか。

事業者 煙ハウスとそれから消防のところは消防から数字をいただきました。それから、

「カエルキャラバン！」に関してはスタンプカードというのを配っていて、そのスタンプカードのはけ数と、それからスタンプカードは大体親子さんで来られているので、スタンプカードが600枚はけて、親御さんもいらっしゃるというような形なので大体倍にはなるというのが、そのプラス・アーツさんというパッケージをやられているときのところのカウンターの集計の仕方だということだったりしたので、そこに沿って600枚のスタンプカード、プラス親御さんということで1,200名参加というふうにさせていただきました。

起震車、はしご車はそこに並んでいる方なのでそういったところです。

宇都木委員 はい、わかりました。

伊藤委員 いろんなイベントとのダブルカウントはその方法だと出てきますよね。

宇都木委員 かなりあるよ、そのことが。だから、これが3,000人というのはどこかに1回参加した人たちの個数ではなくて、1人の人があちこち行っているからそれも含めてということでしょう。

事業者 延べ数では実はなくて、まず約3,000人という中で、多分3,000人以上来られているのですけれども、その来場者のカウントというのは、当日皆さんにもお配りしているうちでプログラム。それが2,500枚、持っていかなかった人も結構いるので、ちょっと一部配れなかった時間帯があったりするんで2,800枚というのはそこに配れていたというのがもうこれは確定なので、それはうちを2枚持っていく人はあまりいないので、なので2,800はもう絶対。

伊藤委員 うちでわかるということよね？

事業者 そうです。来場者はそっちです。こっちの上の合計数を足すと3,500とかになるので、なので延べ数ではなくてうちのほうで来場者はカウントしています。

宇都木委員 わかりました。

久塚会長 逆算すると1人が1.5カ所ぐらいしか行ってないという感じになってしまうかもしれない。

宇都木委員 それから、もう一つ教えてください。実行委員会をつくって、その呼びかけがここに、5ページにいろいろこういった団体に呼びかけましたよというのがあります。それで、そのうちのこの新宿NPO協働推進センターに呼びかけてここから何団体ぐらいが今度入ってきますか。

事業者 まず資料1をごらんいただくと、実行委員会のメンバーというのを団体名を

書いてあります、この両団体も含めて。両団体と新宿区の社協さん。

宇都木委員 ここにないから新宿NPO協働推進センターの加盟のNPOだとか、協働推進センター自身も入っていないということですか。

事業者 そうです。オブザーバーで1度去年の段階でお越しいただいて、お声かけはしましたけれども、日程も含めて調整がつかなかったといったところなのかなというふうに思っていますし、例えば難民支援協会さんなんかは新宿NPOネットワーク協議会、その参加団体だったりもするので、そのセンターを通じて呼びかけたというよりは、どちらかというと個別に危機管理課と私たちのほうからお声かけしたほうが多いかなと思います。

宇都木委員 いや、これを見させてもらったのだけれども、市民団体というかNPOだとか、そういうところがちょっと少ないので、参加が。要するに市民が、もう少しできるだけ多くの市民が関心を持って参加するというのが本来の防災だと思うのです。そこがこのある意味で怒られるかもしれないけれどもどこにでも、この防災とつながっていたらどこにでも出ていくような人たちだけではなくて、初めてだとか新しい層がどんどん出てくることがいいのではないかと私は思っているものですから、そうするとそのどうしてこの人たちが来ないのだ、こういう人たちが入ってこないのかねという原因究明はこれからやるのですか。

事業者 そうですね、もっともっとふやしたいとまずは思っています。ただ、どの立ち位置に入っていただくかというのは別にあると思っていて、実行委員会というのは具体的なその役割を持っていただいた方に入っていただくと思っていますので、名前だけ並べていくということとは違うと思っています。なので、今回実行委員会に入っていただいたそれぞれの団体さんには、入っていただきたい理由はここのポジションを担当していただきたいからなのですよというようなこととセットでお願いしていった形にまずなります。

それ以外の協力の形、例えばちょっと広報でお声かけしますよとか、そういったところなんか協力のほうに入っていただくとか、当日だけこういったことができるのでといった場合にはブースの出展として入っていただくとか、それぞれかわりのコミットメントの強さというのはきちんと分けていったほうがいいというふうに思っています。

それで、総体としてふやしていきたいというのはあります。ふえ切れていないのは、力不足というのが一と、1年目で圧倒的に知名度がなかったというのは正直なところで、このイベントがどんなものなの、そこに参加するとどんなメリットがあるの、いい効果があ

るのというのは、私たちも十分もちろん伝え切れないですし、例えばイベントの様子の写真が既にあるというのが1年目の苦労したところだったりするので、そういったところは2年目から少しやりやすくなるのだろうというふうには思っています。

久塚会長 だから、実行委員会、協力・協賛、今話してくれたみたいにこういう感じの分け方と同時に何をこのほうでお願いするという内容で分類すると2カ所に名前が出てくるところがあるかもしれないけれども、今の質問に答えられるというか、そういうのに近づいてくると思うので、こんな実行委員会というのは確かに組織に入ったということで明確だと思うのですが、あなたが言ったみたいにどの部分をお願いしますよということの話し込みをしていくとうまく組織化できるかもしれないなという印象を逆に持ったのです。それ、お願いできればなとは思いますが、ちょっと試してみてください。

事業者 はい。例えば考えているのは、わかりやすく言うと、具体的に言うと来年は障害者とか少し要援護者の話というのをもし触れられるということになれば、そのことを通常業務としてやっているけれども、防災に関してはもちろんやることもあれば、ただ福祉関連では強いという団体なんかに実行委員会をお声かけしてプラスアルファ入っていただくとか、そういう形でふやしていくというのがいいかなと思っています。

久塚会長 だから、実際この事業だけを取り上げるとピースボートと新宿区と二つで協働しているみたいだけれども、この実行委員会を見るとその周りにウワッとたくさん出てきているわけですから。ピースボートが呼びかけるにしろ、新宿区が呼びかけるにしろネットワークができていったわけだから、それをこの協働事業との関係でどういうふうに位置づけるかはとても大事だと思う。二つでやってほかに実行委員会をと、その周りまで入れて大きな意味での協働ができていくわけだから、だから仕掛け人同士でお二つだけの協働ではなくて、こういうのができたというのを意識してつくっていけばまた違った展開になるかもしれません。

そうしないと私の印象から言うと、ピースボートはあまり表に出ないで、危機管理課さんが非常に汗流して頑張ったなみたいなイメージがあって、ああ、来年はあなたたちがそれぐらいやってよというような気持ちはありますが。大体たくさんの団体と手をつなぐことができたでしょうからぜひ展開を見せていただきたいと。

ほかに意見交換でどうですか、発言は。

担当課 今回の関連で私のほうからさまざまな団体が地域にあるじゃないかと。だから、そういうところとしっかり連携しなさいと。それが実行委員会とか協力団体というところ

で企画運営にかかわる、かかわらないというのはちょっと別といたしまして、本年度も私も青少年育成委員会という組織があります。その会長会に出向きまして、こういうイベントを実施するということでアドバイス等、助言等あったらまた教えていただきたいということもやりました。

また、学校に対しても全学校の校長、教職員にもこのイベントの周知もいたしましたし、また教育もお願いしたところです。ご提案のとおり来年度で要配慮者との連携というのが一つテーマにしておりますので、そこは障害者団体であったり、または民生委員さんであったり、あとは高齢者クラブなんかというのもあります。そういうところとまた意見交換なんかもさせていただいて、実のあるイベントに、事業にしていきたいというふうに考えております。

久塚会長 今おっしゃったように学校に回ってお話をしていくということだけでも、この中には出てこなくても、実際紙の裏側に存在しているというようなことが実施の中の評価として出てくるので、その実績というところの書き方もあると思うのです。ちょっと遠慮気味なところもあるので、逆に1回話に行っただけで、やった、やった、やったと言うのもちょっとどうかと思うのですけれども。

事業課 はい、わかりました。できる限りのその関係団体との連携というのは深掘りしたいというふうに考えておるところです。

衣川委員 以前にもあの場所で防災訓練があったと思うのですけれども、地域防災訓練とのつながりを、もっと各小学校で行われている地域防災訓練とのつながりをこれをするのでどうつながるのかということ、先ほどもお話出ていましたけれども、地域の防災訓練は毎年同じ方、地域の方が出ていて、なかなか高齢者の方も多くて、私自身も小学校の中で出ましようねと言ってもなかなか厳しいので、今年度ちょっと募集をかけて申し込みをしてもらったら行かなければいけないなと思って、来るのではないかなと思って、そんなことをしているのですけれども、このチラシも学校からも子供たち経由でいただきますが、たくさんチラシが来る中でこの防災訓練の必要性みたいなものがどうやったら各小学校にも伝わるだろうかというようなことなどがいろいろ気になっています。

あそこで行われて結局例えばほかのイベントでも、電気の会社とかガスの会社とか、今、防災の大切さとかいうのは新宿御苑のイベントとかでも伝えていたりするのです。そういった同じ団体がここに来て、防災フェスタという名前はついているけれども、ほかのイベントと、それは例えば環境のイベントとどれぐらい違うのかなということが参加した人に

どんなふうに伝わったかなというのはちょっと。楽しいけれども防災っぽさがうまく伝わったかどうかというのは、ちょっと正直不安に思っていて、そのあたりをどう広げていったらいいか。

例えば「カエルキャラバン！」なんかも環境のイベントなんかでも見るわけですが、子供たちがおもちゃを持ってきて取りかえて。それが親子で来たから消防車にも上った、楽しかったね。それで終わってしまうだろうかというのはちょっと不安に思いました。それをそれで終わってしまわないような工夫がこれから先あると思うのですけれども、ちょっとそのあたりを聞かせてもらえたらいいなと思っています。

久塚会長 大きく言うと、以前行われたのからどう展開したかみたいな、違いがあるのかということと、ほかのいろんなイベントがあって、防災と冠がついているから全体と見れば防災に見えるのだけれども、あれ、名前を冠を変えて環境何とかとしたらそのまんまみたいに見られる要素もないわけではないかもしれないみたいな。

衣川委員 そうです。

久塚会長 バツではなくて、いかがですか、どう工夫されているのでしょうかというようなことで。

事業課 まず私のほうから、地域防災訓練というの、それは町会がやる自主訓練であったり、避難所を中心とした避難所の運営であったりというのがありますけれども、そこにどうやってつなげていくかというところを一番厳しいご質問であるところなのですが、一般的に若い方などとPTAのお父さん、お母さんとも話す機会の中で、日常生活の中で防災はどうしても後回しというか、自分に置きかえられない。面倒くさいというようなどうしてもイメージがある。

そういう中で今回防災というのは大事なのだよ、すごく命を守るためにまず自宅の防災対策をしっかりしましょうねというところのきっかけを何とかつくりたかったというところでは、大勢の親子が「カエルキャラバン！」というものに釣られてこられたのかもしれませんが、まずは来ていただいたと。

その人たちが時間がある中で例えば東京電力のところで安心ブレーカーの話聞いたとか、NTTさんのところで伝言ダイヤルというのを聞いたとか、消防のところで煙をハウスで体験したとか、そういうものがあって、ああ、これが非常にいい機会になったと。今度近所で防災訓練があるときは行ってみましようという形になればいいかなと。それがすぐ目に見える形での実績には出てこないかもしれませんが。

ですけれども、担当としてはもう地道にこういうことをしっかり取り組んでいかなければいけないというふうに認識しております。

小学校の方々、さまざまチラシが配られるというところで、1日に子供たちが5枚も10枚も持ってくるから薄まってしまうかもしれません。そういうことから今ちょっとだけなのですけれども、こういうことがまずモデル的にできないかなというふうに区として考えておりますのは、PTAと連携した何か防災の訓練。それは新宿区ではなくて狭い地域で、例えば戸塚の何とか小学校であったり戸塚駅、例えば四ツ谷のエリアとか、まだそういうところのまさにPTAの方だと思いますけれども、連携したものができないかと。そういうところで少しずつ防災の重要性というのを広げていきたいということを考えております。

また、各課でさまざまなイベントをやっております。そこに必ずと言っていいほど防災の啓発をしてくださいということで危機管理課であったり、都市計画部の担当課であったり、そこは耐震であったりとかやっておりますので、啓発に出向いていますので、それと今回のイベント、何が違うのというところなのですが、今回はNPO、NGO、関係団体が防災についていろいろ説明していただいた、啓発していただいた。防災関係機関も10近い機関が、団体が来ておりましたので、そこで啓発ができたというところの色分けといえますか、そういうのができたのではないかなと。

そう言っても少し防災色がもうちょっと出ればいいのではないかなというようなお話もございました。ですから、今後になりますけれども、あそこで体験型というのがもっとふえれば、今回は例えばなのですが、消防の取水制限があったもので実際に水を出すことができなかった。あれが放水できたらもっと実体験できたのではないかな。私たちができるときとしたら災害時どうやってご飯はつくるのですかというものをデモンストレーションしたり、実際にやってもらったりということもできるのではないかな。

そういうところでアイデアをいろいろ絞り出して、また来年度以降につなげていきたいと。また、その地域においてもそういうPTA、若い方々との連携というのも実施していきたいなというふうに考えております。

衣川委員 ありがとうございます。

伊藤委員 確認させてください。予算書の中にカフェ・炊き出し用費用とあるのですけれども。炊き出しのところに、現場に私は行かなかったのでどんなものが出されたのか確認していないのですが、アルファ米だとかそういうものですか。

事業者 はい、一番初めの事業採択のときのものを見ていただいているのですよね。カフェ・炊き出しという形はやめました。ブースで少し、飲食のブースを出していただくというような形にして、トルコケバブ屋さんですとか、焼きそばだとか、かき氷だとか、あとそういったものを行ったのと、あとそれぞれのNPO、社協さんなんかはアルファ米を来た人に配るだとか。

伊藤委員 配るだけだよね。食べているというのはなかったですよね。

事業者 防災サポーターさんのところは少しやったのかな。

伊藤委員 だから、そこら辺を結構力を入れて、来た人にアルファ米だとかがこういうものですよと。そういうのを実体験で食べてもらうとよかったなと。僕らはよくそういうことをやっていました。

それとあともう一つは、この防災のことでここはよかったのだけれども、あまりにも危機感というのがなかった。地震とかのときはこんなになってうまく電話できないのだなとかというのがあってもよかったかなという気がした。

それと、この間のブース、入って体育館の前あたりのところはいっぱいなだけれども、反対側のブースはすいていたの。だから、うまく全体の配置を考えてやるともっとよかったなという気がする。

事業者 はい、恐らく実行委員会全体でイベントのつくりに関しては、また10月25日に振り返りをやることにしています。それぞれ少しずつ聞いていますけれども、やっぱり広場の名前で行くとやくどうの広場という危機管理課も行って、子供の「カエルキャラバン！」もやってというところと、それからNPOがブースを出していた芝生の広場といったところの人の入りが全然違って、そっちのNPO法人さんのほうはちょっとしんどかったというのは、これはもう全体的な評価です。

こっちのNPO側のブースのほうは基本子供向けのもの、内容もあったのですが、基本的に大人向けに説明していただくかというようなことで、そこの大人の層自体の来場者がちょっと少ないというのがあったので、来場者の層をちょっと確保しなければいけないというのは次の課題かなというふうに思っています。ちょうどNPOブースを見て回りたい来場者の層というのを十分に確保できなかったのも配置がえの話もあるので、もう一步来場者の層の問題もあるので、そこをちょっと合わせて考えなければいけないというのは、もう反省点で出てきて考えているところです。

事業課 私のほうからは先ほど衣川委員からもお話があったように防災色をもっと強く

出して体験型というような答弁をさせて、ご回答をさせていただきましたけれども、今もご指摘があったようにアルファ米という非常食、もうここで9割方お約束いたしますけれども、来年度はその試食コーナーというのを、ご飯も非常食というアルファ米の五目ご飯もありますし、非常食の一つビスケットというのがあります。また、ご高齢の方、小さいお子さんには、缶詰ではございますけれどもおかゆというのがあります。だから、そういうものを少し持ち込んで食べてみてくださいと。意外とおいしいでしょう、ご自宅でもしてください、そういう啓発をしっかりとやらせていただきたいと思います。

伊藤委員 そうすれば家庭でそういうのを買い込む人も出てくるかもわからないしということですね。

事業課 はい、わかりました。

加賀美委員 ちょっといいですか。一つは相互検証、自己点検が一つになったやつ。往々にして事業者の方は高い評価をして、行政側は低い評価という言葉が入っていましたけれども、1点だけクエスチョン5ですか。「事業目的を相互に確認し明確にして、計画づくりを進めましたか」というところでは行政側の評価が高いわけです。事業者の評価は4で、行政側は5をつけているのだけれども。

そこがまず1点目。それから、合わせて聞いてしまいます。語学ボランティアを今回発足していますが、事前には韓国語のボランティアの方を確保するという話になっていましたけれども、当日は韓国語のボランティアの方がいなかったというのは何かあったのか。なおかつ、その新宿に在住している外国人で一番集中です、韓国、ベトナム、ミャンマー、ネパールという順に並びますけれども、そういう在住の国籍の方たちに対応する形でのボランティアの確保というのは今回考えなかったのかということと、3点目は今回協賛企業、企業から協賛金をポーンと見積もったよりふえました、当初の予算より。あの規模の協賛金がないと今年度のような事業実施できないのかどうか。あの協賛金を出していただける企業を開拓する余地があるのかどうか、その3点について。

久塚会長 では、これを最後にして、あと意見交換も終わって、ヒアリングも終わって、何か委員の中でのという共通認識を詰めていく。まず1点目の評価が4で出ている。

事業者 イベントとそれから担い手育成という二つの目的というのが上がっていると思うのですが、担い手育成のところなのですけれども、私たち自体は災害ボランティア活動というのを被災地でもやってきている団体です。そちらのほうは事業としては、組織としては大きい事業としてやっていて、その避難所での訓練に入っていくというのは、一つの

地区の担い手、地域防災の担い手だと思うのですが、その形にとらわれずに、いざ首都直下が起こったときいろんなことをやらなければいけないので、いろんな担い手がふえたほうがいいというふうな思いがまだあります。

そのあたりは3年間やっていく中でもっといろんなことができていけばいいなというふうに思っていたりするので、その避難所に限定したくないと実は思っているというところの違いなのかなというふうに思っています。でも、避難所も大事な一歩なので、避難所のところの担い手をもっと若年層も入ってくればいいなというようなことは別にずれてはいない点なのですけれども、それだけで首都直下に対応できると思っていないというところかもしれないというところです。

次に語学ボランティア、韓国語のボランティアの方はいらっしゃったのですが、身内の不幸で当日来れなくなったのです。それ以外の語学ボランティアもそれぞれのコミュニティの方に一本釣りで声かけというのをやるほどの労力がなかったのが正直なところで、募集をかけて集まってきてくださった方でこれだけ実はいたという状態なのです。

募集をすればどういった返りがあるのかなというのはことしわかったので、足りないところに関してはちょっとこちらからの声かけというのをもう少しやらなければいけないだろうというふうに思うので、もしかしたら来年韓国語のボランティアがまだお一人しかいなかった状態だったので、そのお一人がキャンセルになったので、もう少し多分分母があったほうがいいので、ちょっとお声かけしようかなと思っています。

加賀美委員 多文化共生推進課では多文化防災フェスタとかやっていますので、そちらの多文化共生推進課のほうにちょっとご相談いただければ、語学ボランティアのほうは確保の手配ができますので、そのときは話をしてください。

事業者 はい。

次に協賛金については、これからちょっとまた危機管理課ともご相談してですが、ぜひあれば本当に教えていただきたいというところで、体はもう少し使わなければいけないだろうというふうに思っています、ご協力くださいと。協賛金を回るのも1年目の成果がないと回りづらかったのは正直なところで、結局何人来るのですかと言ったときに成果がないので、いや、2,000人来てほしいとは思っているのですがだともっと説得力に欠けるので、そういった意味では自信を持っていいイベントですというふうには言いやすくはなつたので回ってはいこうと思いますが、実際私たちのほうも正直予算のことはあって、100万円収入がないのに100万円持ち出せるかと言ったら持ち出せません。な

ので、そこは真剣に考えていかざるを得ないだろうなと思っています。

久塚会長 金がなかったらこれ、今回ぐらいの規模のものというのは期待できないのですかという質問もあったと思います。

事業者 予算は必要です。

久塚会長 では、それなりになかったら。

事業者 はい、100万とかの1個からという形がありがたいですけども、その10万円ずつ積んでいくというやり方ももちろんあるので、予算規模とイベントの規模の大きさはやはり多少は比例するとは思いますが。

久塚会長 では、今回のものを終わったときにある程度成功したというのであれば、それぐらいの予算になるように努力をしてもらうことが必要ですね。

事業者 そうのことだと思っています。なので、来年度の中身を考えるまでに、少しそこを今年度中にもう動き出さなければいけないなと思っていて。ブース出展料がもう一步伸びないなというのも実際あるので、やっぱり応援してくださる企業、財団とかそういったところにきちんとあいさつに回るといったところは必要だなと。その先のリストアップをだからもうちょっと欲しいものを本当にあれば、ここだったら協力してくれるのではないかというのがあれば逆に教えていただきたいというふうに思っています。

久塚会長 頑張ってください。

事業課 区のほうはそのまずこの設問が計画づくりのプロセスの質問で、事業目的を相互に確認、明確にして計画づくりを進めたかというところについては、先ほどA4版の資料でご説明しましたけれども、その共有はしっかりできて進められたと。

実際の実施計画というか、実際の計画づくりのところで若干のやはり思うようには進まなかったというところで点数が落ちたりはしますけれども、一番当初の目的や意識は認識できていたかというところではできていたというような判断をしたところです。

もう一つ、その協賛金というところで、これはまた後でもこういうお話になるかもしれませんが、歳出ありきといいますか、お金をかけてやるのかどうかというところの考え方が一つあるのかなという。限られた予算の中でしっかりその内容を濃いものを実施していくというのもこの協働事業の必要な点ではないかというふうに考えております。

そういうことから先ほど来から体験型、防災色の強いものというところで、今回私見ていておもしろかったなと思ったのが、自衛隊が偵察バイクを持ってきてくれました。そこは意外とお子さんから大人の人までにぎわってしまっていて、そうすると私たちとNPO、ピ

ースポートとの役割分担の中で、私は防災関係機関というところのネットワークというのはできますので、例えばそこで集客力というところを高めるために、自衛隊から装甲車を持ってきて、例えばですけれども、またはもう少しみんなが楽しく一つ何かきっかけづくりとしてニンジン作戦ではないのですが、友好都市の物産展をここにぶつけてみるとか、さまざまアイデアが出せるのかなと思っていますので、そういうところで協賛金、お金の部分にも若干関係しますけれども、あまり予算をかけずに防災というものを伝えていくということは考えていきたいと思っています。

事務局 どうもありがとうございました。これでヒアリングを終了させていただきます。

久塚会長 大変長くなってご迷惑をおかけしました。どうもありがとうございました。

事業者 ありがとうございました。

(一般社団法人ピースボート災害ボランティアセンター・危機管理課担当退席)

久塚会長 では、あと10分かそこら、意見交換というか共通認識、こういう答えだったけれどもあれはどう理解すべきかねみたいな形で共通の土台をつくれればいいと思うのですけれども、特になければそれは結構ですが、ございますでしょうか。

はい、どうぞ。

平井委員 さっきの先ほども会長もおっしゃられていましたけれども、結構区のほうが頑張ったというのが多かったのです。

衣川委員 そうです。

平井委員 ちょっとぶっちゃけた話というか、しますと実際にこの案を見たときにちょっとどうかなというのがあって、もう総合防災ぐらいみたいにとやられると少し軽いかなということで、かなり幅広くやれということで、担当のほうで頑張ってもらって、消防とか警察とか管理官とかみんなそろえて来てもらったところがあります。そうしたところ結構そういったところはみんな人気があるので評判よかったかなというのと、あとちょっとアンケート調査とか効果測定のところ少し弱かったかなと。やりっ放し感があって、それもちょっとうちのほうからやってくれということで、結局そこら辺がないとやりっ放しでよかった、よかったで終わってしまうので、それはどうかなというのがあって、それも急遽うちのほうでやってもらったり、私が今言っているのはちょっと来年も頑張ってもらいたいということでもいい意味で言っているのですけれども、1年目ということもあってそれ

それ協働事業というものが我々も初めてなのでどこまでどうやってやるのかなと、どこまですり合わせてやるのかなというところが少しわからない部分があって、お互いにそごを来したところもあったところとは思いますが。

ただ、結果としては人数的には多かった、よかったかなというのと、もう一つ今全体的な流れというのが、これは国のほうも防災推進国民会議というのを設けて同じようなことをやっているのです。同じ日に渋谷区でも、向こうは規模が違って1,000万単位をかけて来たのは1万五、六千来たのかな。みんな流れが今こういう流れなのです。

というのは、今先ほどから話が出ていますけれども、防災と言ってもみんなもう面倒くさいし、やらないのです。そうではないと、国のほうももう身近なところでわかりやすくいろんな日常生活の中で、例えば学校なら学校生活の中でそういったところで防災というものを差し込んでいって身につけてもらうという話がありまして、今国もそういう施策で方向転換しています。

そういった中で我々も初めてこういったことをやってみたと。先ほど話にありましたやっぱり実際にどうやって炊き出しするのかなとか、避難所に行ったらどうやってやるのかなという体験を少しご質問にもありましたので、来年度はそういったことも含めて実際にこうやってやるのだよというのをわかしてもらおう。学校は避難所となっていて、こういうことをやるのですよと、避難したらこういうことをやるのですよとか、何かあったらすぐ逃げるのではなくて、地域と連携して地域の中での救出・救護なんかも、初期消火活動なんかもやりましょうというのがわかるような何か体験型のそういったゲームなんかを、シミュレーションなんかも含めたものを展開していければなと思っています。

そこをうまく地域に、先ほど話にあった地域につなげていければなと、学校とかも避難所につなげていければなというようなことで、来年度は少しそういったことを加味しながら。

久塚会長 アンケートも私聞いていて、やっぱり少しあまり得意ではないというか、十分できていなかった。アンケートができていなかったなということを正直にあらわしていました。だから、でもこういうことの効果というのは難しいです。やっぱり楽しかったですかみたいなアンケートで、もうちょっと何かないかなという気はしますけれども。

伊藤委員 企業の参加もそうだ、ただ企業の宣伝ではないけれども、そういうことよりもこの企業はどんな形で防災をやっていて、それをレビューしてもらおうとか。私のところは災害が起きたときにはこういう形で対処しますよ。帰れない人はとりあえず会社が集ま

ってもらって、そこからこの新宿区のいろんな施設にボランティアとして行く人間が50人ぐらいいるのですよとか。

よく問題になるのは、帰宅困難者は帰宅困難者としているのだけれども、その人たちがただうろろしているのではなくて、その人たちに新宿区のまずいるところで手伝ってほしいと。それをやるのが行政と企業のお話し合いの中でできればというやつだ。

そういうときには企業の備蓄商品も出してもらえばいい、いっぱいあるところは。そういう連携もしていく必要があると思う。

久塚会長 自然に意識してそうではなくて、ある出来事が起こったときに自然にそういう動きになっていくような動機づけだから。帰宅困難者というレッテルを張るのではなくて、もう帰宅しないでお互いに助けるとか。気がついたら家に帰っていなかったとかいう。

伊藤委員 家のほうでは家のほうでそこに勤めている人がそこら辺でやるという形のものが日本全国につながればいいのだもの。

関口委員 ちょっといいですか、ヒアリングでしゃべれなかったの。担当課の方も謙遜されているのか、えらい慎重な物言いでしたけれども、私が思うにはやっぱり1年目としてはすごい上出来なのではないかなと思いますし、採択が始まってから実際に4月から動き始めるのではなくて、もう7月時点から打ち合わせとか始めているとか、大分前向きに。

もちろん皆さんが言うことはごもっともであって、防災色をもっと強めたらいいとか、でもそうすると当初の目的だったライト層のつかみが弱くなってしまうのでそこまで。そうするとだから地域防災訓練と何が違うのという話が別の方面で出てくるから、初回としてはあのぐらいの内容。

久塚会長 あと育成のところね。

関口委員 まあ、そうですね。結果論ですけども、よかったのではないかなと私は思いました。

久塚会長 ほかに、個人の意見で採点を拘束するものではありませんけれども、ほかにご意見はありませんか。

加賀美委員 初年度としては合格点ですよ。また来年度どうなるか。

関口委員 同じことをやってしまうとちょっと。

伊藤委員 集めた中でボランティアがいっぱいいいて、そのボランティアの中からまた20人ほかを、ボランティアをつくるわけじゃない。それが果たして可能になっていくのか

どうかということも2年目、3年目の問題になっていく。そこがコアだと言うのだから、そこが問題だ、やはり一番。

平井委員 本来はそのコアボランティアを学校とか避難所の訓練だとかそういうところにつなげていくということが第2の目的なのです。そこをちょっと少し注視してやらなければならない。

衣川委員 先ほどもちょっと出ていたと思うのですがけれども、育成会とつながったらどうかというような話も出ていたので、その地域に既に動いていらっしゃる方々をもっとこちらのイベントに巻き込む形でもつなげられるのかなという、後々つなげられるのかなというふうに思いました。

平井委員 つながりがあるボランティアとか団体というのがやっぱりあって、やっぱり地域で活動しているところというのはうちのほうからちょっと呼びかけていかないとなかなか知名度があるので、そこ、来年度はもう少しうちのほうからも幅広く地域で活動しているいろんな団体がありますので。

久塚会長 それがお互いの強みという言葉にあらわれている気がします。

平井委員 そうです、それぞれ強みがありますので、それぞれのところに呼びかけていくというようなことをやりたいと。

久塚会長 やっぱり協働というのは両方が同じものでも協力したってあれなので、こっちに強い、こっちに強いというのがこうなって2倍、3倍になっていくということができればいいと思います。

加賀美委員 前々から言っていますけれども、危機管理というのはやっぱり日常の延長と言われているから、その日常で取り組む中で自然体でできていけばいいのですが。

伊藤委員 だから、顔の見える関係がそこら辺に飛び散っていればいろいろいいのだけれども。来年に期待。

久塚会長 個人の採点というのはお任せします。では、事務局から手続を説明してください。

事務局 そうしましたらきょうのヒアリングの評価書につきましては、本日同じものの書式のデータをメールでお送りさせていただきますので、そちらに書き込んでいただきまして、期間が短くて申しわけないのですが来週の金曜日、10月14日までにご提出をお願いいたします。

久塚会長 事務局でその1週間後にまとめて、そのまた1週間後にここで会議という。

事務局 そうですね。10月21日に第6回の評価会を開きまして、そのときに皆さんの評価点の決定とコメントについての調整をしていきたいと思えます。

次回、10月21日の金曜日の午後2時からになりますので、どうぞよろしくお願ひします。

久塚会長 はい、ではこれで手続、送られてきたものをよろしくお願ひしておきます。本日の会議はこれで終わりたいと思えます。どうもお疲れさまでした。

事務局 ありがとうございます。

— 了 —